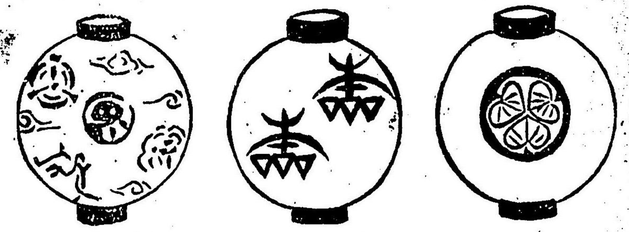
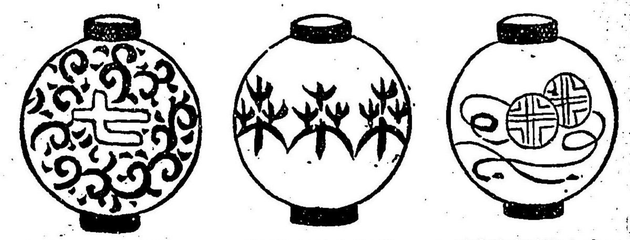


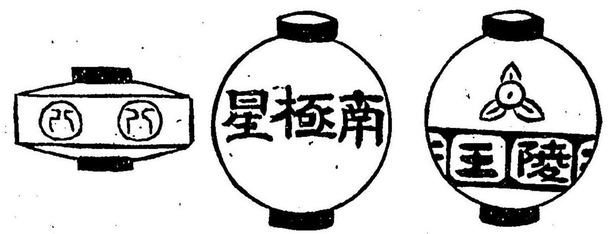
拜領の提灯　本町猩々車　馬場町林和靖車

長者町二福神車　和泉町雷車　京町小鍛冶車



中市場町石橋車　桑名町湯取車　七間町橋辨慶車

宮町唐子車　玉屋町西王母車　末廣町船車



門前町陵王車　鐵砲町福祿車　船車の獨樂形

鐵砲町獅子車　住吉町河水車

此又提灯をつるすに圖の如き鐵の細かねを用ひる、之れを名けて稻妻と云ふ

若宮の大提灯

六月十五日試樂の夜に境内の松の枝に釣るす大提灯は徑口が一丈六尺で長さが二丈三尺といふ喫驚仰天の大物であるが之れを造つて奉納した施主は尾州侯劍道の師家野村氏の門弟中より武運長久の爲め享保年中に神社へ納めたもので若宮の大提灯といへば境内中の壯觀であつたが百年の後ち此有名な大提灯も點燈する事が打絶へたを明治の時代に至つて鐵砲町一丁目か其跡を引續き年々之れを點す事になつた、然るに彼の提灯を釣るす松の木が毎年の重量に絶へ兼ねてか遂に朽果たので其後材木を以て屋形を結び夫れに引あげる事で一段の光景を損じたとは殘念

殊に當社は弓矢神、とて武家方の崇敬が厚く弓鎗の道場福澤、市川、河野、星野、杉立、長屋、等の各稽古場より多數提灯の奉納があつて今も之れを献燈してをる

雨具

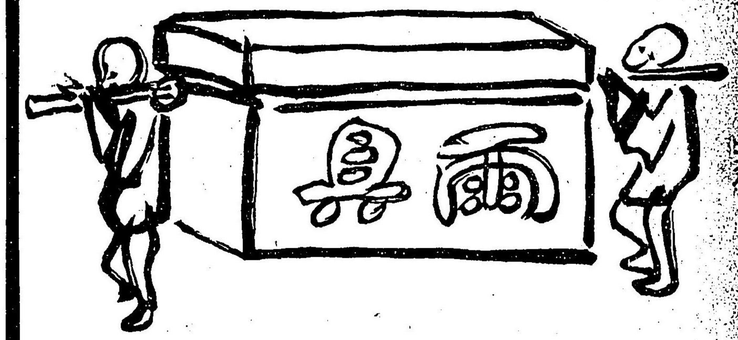
名古屋祭りの雨天順延と云ふ事は古來よりの習慣で別に不思議にも思はぬが地方の人が聞くと異樣に感じるさうな、成程京都の祇園會は當日雨天でも必らず執行する、其他各地の神事でも大相撲の興行然と雨天順延の祭禮は尠ないやうな、然るに名古屋は百年も二百年も前から雨天延引といふがお定めで、昔は其都度町奉行所から延引のお觸狀が出たものである（前のお觸狀の部參照）それで當日雨天なれば無論山車は曳出さぬが若し途中の場合には雨が降らうが鎗が降らうが曳渡して仕まふ

いつこまて氏子なるらむ夏祭　　經年
果なく見ゆる軒のともし火

（長濱祭は途中雨に遭つた時は直ちに進行を止めそこに其儘据へ置て快晴をまつて曳出すといふ）夫れで名古屋祭は日本一の晴天といへども雨具は必らず用意して車毎に雨具荷ひが四五名も附隨して居る

雨具には雨障子と云つて油紙で張つた障子で屋根を覆ひ、其他勾欄下の部分は合羽をもつて包む、又注意の行屆いた町は雨降り幕と云つて替幕迄持參してをる町もある

今より二十年も前の事、若宮祭の山車が前夜に若宮前へ曳込んだ處當日の早



朝から雨が降り出した、然れど一度曳出した車は宿へ曳戻すと云ふ例が無いので六輛の山車は見事に合羽で包み廻しヅラリッと並んだ景色は宜かつたが、此雨が折も折とて八せんに出ッ喰はし七日も八日も降り續けて山車は當分御滯留と云ふ難儀な年柄もあつた

祭宿

各祭町には祭宿といつて祭禮一切の事務は此宿で執行する、それで祭日の十日前に家内を清め注連張の式を濟し幕を張り高張提灯を建て門口に

御神事也不淨之輩不可入

と云ふ立派な札を掛けて祭車は此門前に飾りつける

此祭宿は其町々に依つて年々順番を以てする處もあるが、往古より町住

民が共有物で一戸の家屋を所有して之れを祭宿としてをる町が多分あつた、それも維新後に賣却して其金を分配した町もあれば之れを積立て利殖し又は今に共有家を保存して其收入を祭禮費に使用してをる町もあるそこで祭禮の小半月も前から、其町の若い衆の連中は此宿に集合し（或は囃子方行司の宅を集會所とする町もある）祭禮の當日迄はさしたる用務も無いのに朝から晩まで寄りつどひ將棊、腕角力、枕引抔種々の娯樂を爲す中にも庖丁の利ゐた男は盡の仕度を勝手で料理するもあれば、御馳走の出來る迄肘枕で昨夜の惚氣を聞かすもあり、夫れを聞いて鮓をおごらす男もあれば盡寢して顏に墨ぬらるゝ間抜けもあつて、夫

れは〳〵太平樂なお祭り宿とは此家の事である

忌服

各祭宿には不淨之輩入不可と云ふ掲示が出してあつて總て忌服中の者は一切祭禮に關係する事が出來ぬ慣例である、殊に熱田の大山車樂には此事が最も嚴重であつて若し祭禮中家內に月經者があれば必ず別居をさせ又祭禮十日以前より別火して食ひぬいたものであると云ふ

昔祭好きの楫取が親の忌服中で祭禮に出る事が出來ぬので迚も名古屋には見て居られぬと女房と共に高野山へ參詣と出掛けた、十七日の盡頃に不動坂を登る最中、女房は亭主が勢ひの無い顏色を慰めんとアヽ今頃は辨慶が大丸屋の前へ來た時分であらうといへば亭主はボロ〳〵と涙をこぼしそんな事を云つてくれるなおれはけさから飯も咽へ這込らぬに

山車の乘組

各町とも山車に乘込む囃子方人形方には其町毎に夫々古來よりの規定がある、先づ普通の祭町では十二三の歳に初乘りの式を濟まし初めて麈振棚に乘り込み十四五歳になつて若い衆と稱へ笛太鼓の技藝を修めて囃子方に編入し、それを五六年勤めてから順序によつて行司頭となり大太鼓の役を司つて囃子方一般を統轄し、其後二三年を過ぎて中老となり上段に昇つて人形を支配する順序になつてをるが現今では多少舊慣を改良して昔の規定を守つてをる町は尠ないやうである

又維新前迄は前の如き嚴格な規則によつて祭町に住んだ子弟は夫々一藝を修めて祭禮には必ず出頭するを名譽とし借家住の者は之れに參與する事を許さぬくらゐの權幕であつたが追々に敎育の旺んな世の中となつて今では笛太鼓抔眞面目に稽古する若者が尠なくなり詰りは町内で囃子が

出來ぬ事と成つて止を得ず他町から其道の人を招聘して間に合すと云ふ趣味の尠ない有樣となつた

楫方

楫方は又楫取とも云つて一般山車を取扱ふ人夫の名稱で其町々の出入として古來より數代に渉つて此役を勤めて居る、此楫方にも又古例があつて先づ若い衆と稱し法被を着るもの八人、宰領二人、綱割一人、此十一名を役場といひ、外に總代一名、年寄、中老を合して二十人斗りいづれも金剛力士の團體である、昔は此楫取にさへ容易に出る事が出來ず誰れは何々車の楫方殊に綱割を勤めたといへば其社會で巾の利く事夥しく、夫れが爲め不相應な金を費しても家の面目仲間の外聞之れに過きた名譽は外に無いのであつた、夫れに又此楫方の法則といふは昔各山車の乘組員の規定に準して組立たもので其大體は略同一の組織になつてをるが山

車の乘組員は流石世の進化につれて舊慣は疾くに一洗して今は大方の町には無いやうであるが梶方社會に至つては古來よりの慣例は少しも變更せず今以て嚴重に勵行してをる、序でに其古例のあらましを御咄し申さうなら

茲に一人梶方に編入する者があると彼の八人の若い者の中、古參者は此新參者に法被を讓り宰領と成る、其翌年に網割（網頭とも云ふ）を勤め夫れから年寄役となる、此網割が最も大役で他町の車との應答挨拶を始め網内一切の事を總轄するので骨も折れるが權威も振ふ、夫れに對して錢も費やす、先づ若宮祭りであれば五月十五日を初寄りと唱へて總代の宅へ集合し、其年の役割を取極め六月一日には注連張りと云つて、網頭の宅は家中を清め、注連を張り、幕を打ち、笹のついた三四間もある竹の先きに宿としるした提灯を高く釣るし、何々車梶方と云ふ札を建て此日は一同を招集して酒宴を開く、翌日より車出し迄凡十日間は日夜此宿

に集合して呑みくらし、十二日には早朝より梶方一同祭り町に出頭して車を飾り付け、梶棒を〆直して後ち、役場用一式の裝束を受取つて歸る十四日曳初めの當日は役場十名の者規定の裝束を着け總代年寄附添ひ迎ひと稱へて早朝に網頭の宅に至る、此日は最も網頭の祝意を表する日柄で親類知己より到來の酒肴又は反物、手拭、三尺帶、其他種々の祝儀物が所狹しと飾り立てある、そこで早朝に祝盃をあげて後ち一同打揃つて若宮神社へ參拜し、夫れより町役員の家々へ祝言に廻り然して後ち車を曳出す準備に取り掛る、偖此祭禮中の辨當雜用凡ての費用は若い者の負擔する事で中老年寄は皆喰ひ倒し者であるが是も又順次階級を經て此位置に至つて居るから仕方もないが網頭に到つては中々の大散財をする事で所謂錢出して車曳くとは此事である

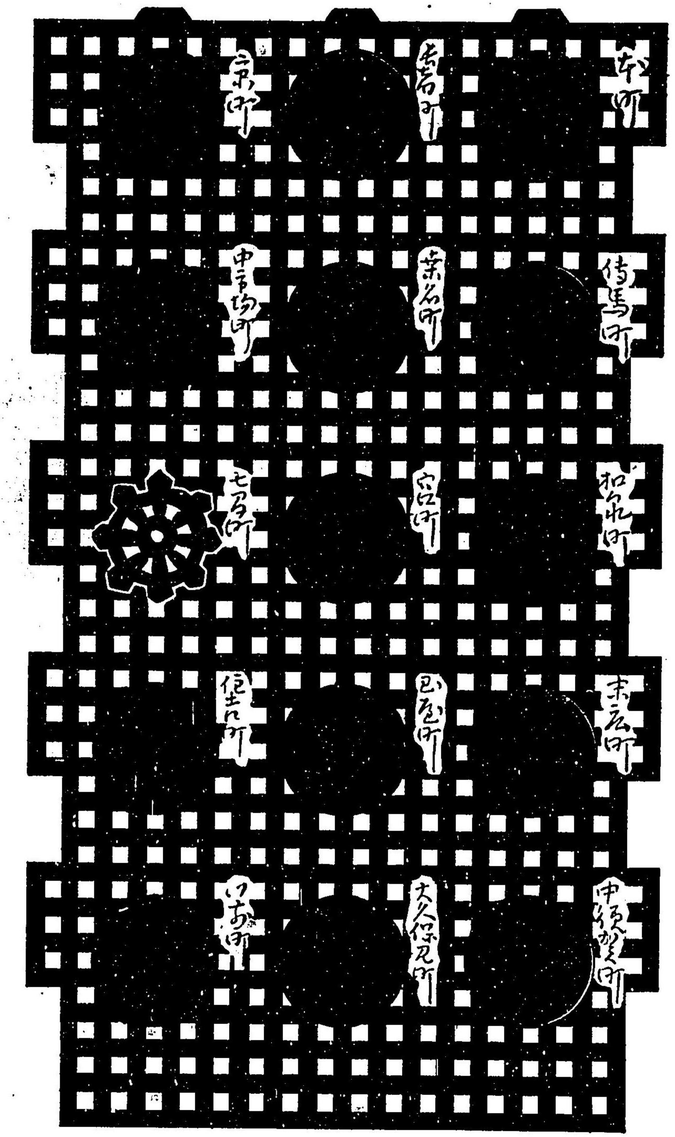
割羽織着ては
まつりの割まへも
あたま割には
割れぬ綱割

楫方の法被

白紺の大辨慶で脊の大紋に町の印を染ぬき襟は紗綾形の黒繻子で、股引脚袢、腕抜迄同じ小辨慶を用ひるは名古屋祭一般楫方の制服のやうに見へるが、享保時代の古圖を見ると茶地又は淺黄地の縞類で今の如き法被は一向に見へぬ、脊の大紋に町名を印す事は若宮祭りの楫方には二三用ひてをつたが東照祭の方には大昔は無いやうである、元文の頃何町歟の考案で今のやうな大辨慶を染出したのが時の流行となつて其後楫取の法被は之れに限るやうに成つた（或は七間町が卒先かも知れぬ）見馴れた加減か至極強さうな模様で宜い意匠であるから此上の改正は最う出來まい綱割は割羽織に立附袴で一本差、宰領はモギ胴に立附袴といふ裝束は昔も今も變らぬ、又東照祭の綱引は投げ頭巾で若宮祭りは菅笠を冠る、綱引の法被も皆夫れ〳〵に意匠が有つて總て大筋な趣向で古體な模様の半纏が今も町々に殘つて見へる

○昔本町の棍取が十二三の悴を連れて車に出た處當日三の丸邊で糞がしたいと云ひ出した　親父「此御上覽前で糞がなるものか本町迄辛抱しろ旦那の家でさしてやるからとすかしながら漸々猛々車が本町へ來たので兼て出入の桔梗屋又兵衛さんへ飛び込んで用事は濟したが、悴が不思議さうな顔して出て來たので、親父「宜かつたか　悴「こゝの雪隱は座敷の眞中に大きな鉢がつけてあつた

○又新田の百性が東照祭の幟差に出る時十五六の悴を床几持に連れて出頭した維新前のことであれば兩側に竹矢來を結ひ犬の子一疋も通さぬ揃ちぎつた往來の眞中を今日を曠れと具足を着け肩いからしての行列中、後ろから雜兵の悴がトッ樣〳〵と呼ぶので親爺はいかにも間の惡るさうな容子で一向に返事もせぬ悴又「トッ樣〳〵　親爺「無言……悴はこらへかねて、トッ樣大將〳〵と呼んだ、大將と言はれて親爺は「ムヽ」と後ろを向くと　悴「糞がしたい



力持

梶取には力自慢の男が多いので所々で車の力持をする、其仕方は先づ一人の梶取が腹帶を〆直して梶棒を肩に乘せ兩足を揃ねてグイとかつぎ上げる此時一人の監査役が車の輪を兩手で持つて地上を離れるを境ひにクル〳〵〳〵と廻はす、尤も力量の弱いものが擔げば車は中々地盤を離れぬから容易に廻る事では無い、又强力なものは此車の何回も廻轉する間擔ぎあげてをる、夫れから又梶取社會で自慢なものは曲場である（山車の辻々を曲る事を曲場と云ふ）其曲場もいろ〳〵の仕形があつて、コスリ、ドンデン、文廻し、抔と云ふのは非常に骨の折れる仕事で之れを手際よく見事に扱へば拍手喝采鳴りも止ぬが若し一ッ仕損じたものなら夫れこそワーイ〳〵と囃子立て其不名譽を嘲ける

黑船の梶取の古株の咄しに、私しは八歳の年から輪掛けの上で祭の趣味

を覺へ、今年七十になる迄一年の休もなく勤めて來たが、曲場には「テコ」の遣ひ方が一大事で此遣ひ方が惡ければ何程楫方が强力でも船は流れてしまふ、それで楫棒に四人宛で八人這人り、テコは左右に二三人が規則であるが、船人が多過ぎて船が山へブツかつてはならぬから長さ五間の船は辻の曲場が一大事である角祭りとは餘程取扱ひの仕憎いものぢやが楫の取りやうとテコの遣ひ方一ッで一點の過ちもなふ自由自在に浮かせて行く事が出來ると、之れも又餅は餅屋で尤もさうな咄し

楫方の禮儀

中老、年寄、宰領、綱頭、若い者、と此階級によつて着席順迄禮儀は正しく、又他町の山車に對しても夫々に交際の作法がある、先づ祭禮の當日前車が曳出さんとする時次の車へ對し只今より曳出す貴町に於てはお差支無きやと挨拶に及んで偖いよ〳〵曳出す場合には次車の楫方四五人は前車に出張して綱にとまり其曳出しに力を添へるといふが作法である又途中休息の時宜においても此禮儀は各山車とも順次に行ふ事で其他山車の摺違ひにも又禮儀がある、假令ば傳馬町の山車が自町を曳渡して居る處へ宮町の山車が傳馬町へ曳行く時、場合によつては摺違ひをせねばならぬ事が出來る、其時には傳馬町の山車は左りに寄せて進行を止め宮町の山車を客車として待遇し双方とも愼重の態度でもつて摺違ひを勵行する、或は他町同士が摺違ひの時も互ひに禮儀の挨拶をして左側をとり輪と輪の距離を計つて危險の無いやうに注意し双方車體の央を過ぎた時前面の楫棒を一勢に右へ直すといふが規則に成つてをる、又前車と後車の距離については一定の法則とては無いがたとへ前車が進行の遲き場合といへども後車の綱を割込む事は絶体に禁じてある

人の波わけて
引出す黒ふねの
浮いたはやしに
いさむ楫取

澤道

喧嘩

喧嘩はお祭りの花といふてもあるまいが昔から山車同士の喧嘩は隨分數の多い事で其多分は楫方の紛擾からである、喧嘩の原因は前に述べた禮儀を過まつたから起るのが多い、殊に曳込みの夜などは尤も危險な事で例年の場所より一尺出過ぎてをるとか、摺違ひに輪を摺らしたとか、後ろから綱を割り込んだとか、或は時間の迫るにも抱らず故意に前車が棟りに棟らかして後車の進行を妨げる抔、楫方の作法に一ッ間違つたものなら直ぐと喧嘩をオッはじめる、何しろ互ひに氣の立つた場合であるからヒケを取つては己れの車の估券が下ると妙な處へ力瘤を入れて摺つた揉んだと入組んでは喧嘩を持ちあげテコとテコとが天窓の上でテコ〳〵舞してボカリ〳〵と降つて來た事が何度もある

楫取の女房

宿の亭主は何々車の楫方、殊に今年は綱割と云ふ嘖れの役、親類から祝つて呉れた縮緬の襠袢の袖もあとは娘の帶揚げにと鍋へ入れて御馳走の世話もいそ〳〵と機嫌のよい世話女房、どうぞ祭禮中宿の人に怪我の無いやうにと氏神樣へ願かけて、偖當日ともなればどふして留守して居らるゝものか家の用心は隣へ頼み子供の手を取り朝から出掛けて車の後ろに付纏ひ、先づ子供を輪掛の上に乘せて嬉しがらせ、今日は割羽織に立付袴の一段と男振りを見あげた亭主が懐ろのはちける程押込んだ祝儀ものを半分助けて持つて遣る杯、皮肉な情の籠つて居る趣味の深い事はッイ一と通りのお祭好き位いでは茲迄の妙味はわかるまいテ

綱曳

万治年代（二百五十年前）には辨慶、雷、道成寺と此三輛の車があつたのみで其頃の綱曳は無役の町々へ申付たものと見へ舊記を見ると飯田町鐵砲塚町、赤塚町、新町、江川町、樽屋町、木挽町、山田町、大久保見町、抔は皆此綱曳に出頭したものである

それで往來に矢來を用ひた時代には此矢來内を一度歩行て見たいといふ近在の若者に綱曳の志願者が隨分とあつたものぢやが現今ではそんな人間は半人もないので請負人を定め山車一輛に三十人程は雇ひ込む、何分にも給料が安いので迚も一人前には通用せぬ屑斗りをはきよせの人間であるから綱を曳くどころの騒ぎでなく手にはゞむ程の太とい〳〵綱の重みにつられ込んでよろめくよふな厄介ものゝ行列とは實にむさくるしい景色である

茲に又おかしい咄しは昔七間町に火事があつた時其混雜中祭り道具の入れてあつた長持を泥坊が引擔ひて春日井郡の志賀村迄持越し、こゝまで來れば大丈夫、なんぞ目ぼしいものでも無いかしらんとソッと長持をあけて見ると大坊主が捻鉢卷の辨慶のあたまや牛若の首がごろ〳〵と結込んであるので、ヒャアーと泥坊は驚いて其儘逃げてしまつた、そこで志賀村から其長持を七間町へ擔ひて行つた處七間町では志賀村の若者を泥坊と見做し此謝罪としてそれより毎年綱曳十五人つゝを志賀村より出すといふ約束が出來て維新前迄は之れを勵行してをつた

足元もよろ〳〵とひく綱引は　可磨
酒のまわつた猩々車

羽根蟻

御輿舁をはじめ一般白丁着の姿を指して羽根蟻といふ異名がある、東照祭では山車及び警固以外の町々からは此羽根蟻が澤山に出る、此羽根蟻共が得意とする處は御輿舁であつて夫れは昔御覽所の前にさしかゝると御殿樣が自分等に御辭儀をさつせるからうれしいとぬかす

お旅所の門に居ねむる羽根蟻も
還御と聞いてばた〳〵とたつ

傘遣ひ

尊壽院樋現坊の供廻りの傘持は所々で傘の曲遣ひをする、或は衣紋流し、水車、又は大空へ高く投げて落る處をチョイと肩で受け止める抔態々の藝當をする、又

馬柄杓遣ひ、草履遣ひといふもあつて夫れ〳〵に行儀作法があり、それを得意に悠々と行列中に扱つて見せる、是等は一寸皮肉さうなもので古實でもあらうが素人目には一向に趣味が薄い、どちらにしても太平な仕草で御恕時代の代品物斗りぢや

野風呂

各山車の綱の前には其町の町代が袴着用で威儀堂々と先供をする其供回りの内には必ず野風呂荷ひといふものを召連れて往く、野風呂は皆梨子地蒔繪の類で美麗を極めた茶道具一式、殊に傳馬町の野風呂荷ひといへば高評なもので其風體が先づ伊達な着附の着流しに片肌ぬいて長脇差、手拭ひを四ッ折にして肩に打ちかけたと云ふ意氣な好みで、殊更にニヤ

ケたイヤミたつぷりな男を撰んで此役をさせる事であるが、それで其候補者に競爭が有つたからおかしい

明治の初年頃には一名腰松と云ふ男で此野風呂荷ひの腰付が得意であつて年々に選拔せられた人氣男もあつた

見たところ
先づぬるさうな
野風呂持

梵天

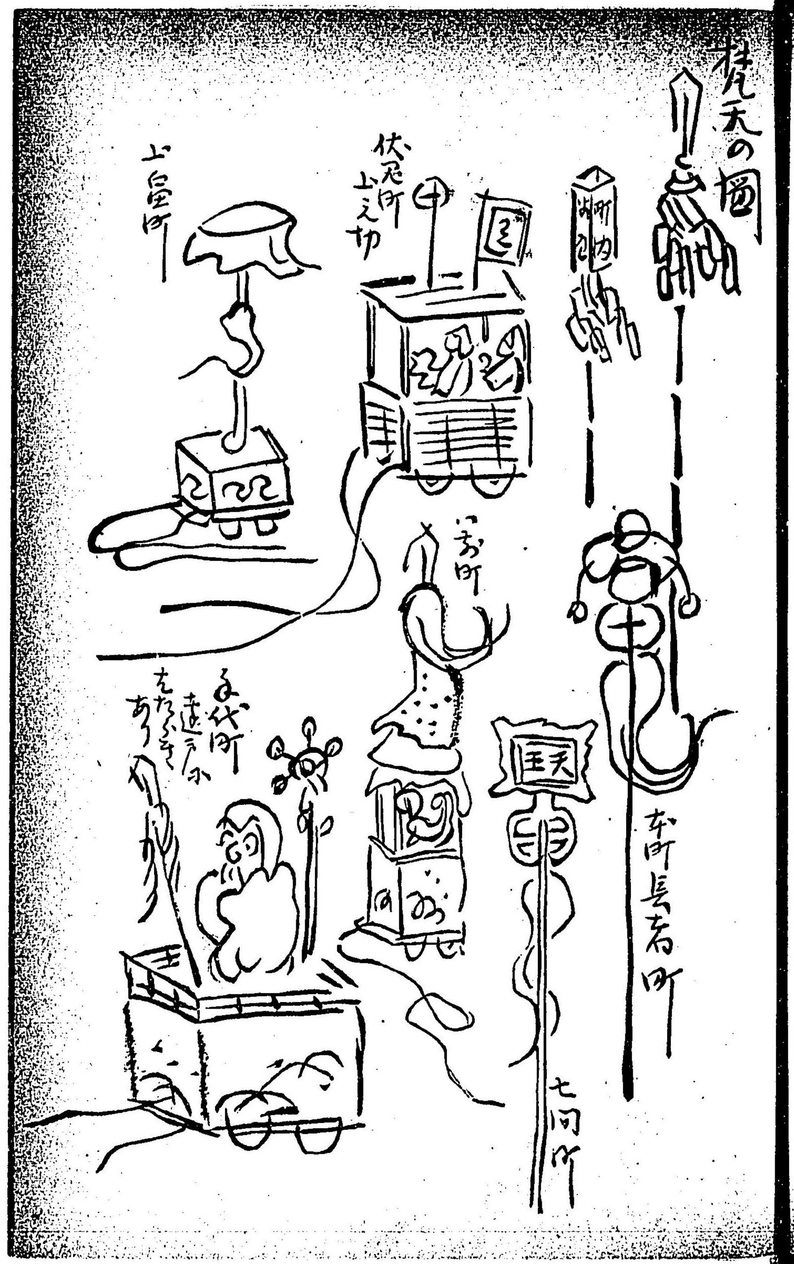
梵天は或は防奠とも書き津島午頭天王の祭事より始まつたといひ、東照祭の元祿年中に傳馬町より梵天王車を出したとあるが之れは梵天帝釋を据へた車で今云ふ梵天では無い、此梵天王を祀る爲に劍拔箱板を捧げる事が始まつてそれを則梵天と云ひ習はしたものであらう歟、はじめは知らず享保の頃には盆中抔此梵天が非常に流行して六月より七月にかけて、家毎に之れを捧げ、又は稚兒梵天といつて多くの子供がこれを一本宛持ちグルリ〳〵と回はして遊んだものであつたといふ

實暦以前は若宮祭黑船車の幟り吹貫の中央へ此梵天を建て、住吉町の河水車の前へも梵天を捧げ、又東照祭の警固中にも大津町、小牧町、伊勢町、抔は警固行列の眞先きへ箱板に町名を書き幣を下げた梵天を捧げて行く古圖がある、此梵天が追々に進化して天明から文化、文政頃には町

々に梵天車を作りいろ〳〵の人形や造り物を乘せ、揃ひの衣裝を派手に着飾り梵天頭巾といふ投げ頭巾を冠り、笛太鼓で面白く打囃し往來を練りあるく事が一時流行して市民は此梵天熱に浮かされ華美を競つて奢侈に流れた爲其筋から屢々禁ぜられた事もあつたと云ふが既に天明五年の記錄には名古屋にて百三十八ヶ所より梵天を出すとある、其頃の梵天囃子と云ふは

ヒウ〳〵ヒウホヽヒウヒー掛聲ヨイ〳〵ヒヒヒイヨフイヒーヒウホヽヒーヒウホヽヒウヒー掛聲サア〳〵是れを祇園囃子とも云ひ、又其頃の唱歌は河崎音頭袖垣節といふを謳つたといふ事である

現今那古野祭りに曳出す玉屋町の傘鉾車、長者町の劍車抔は則ち此梵天の類ひである



祭中に火事

寛政年中の事であるとか四月十七日御祭禮の當日神輿還御の最中に材木町邊に火事が始まつた、然るに本町筋は一體に神事中で一人も横切る事は出來ず若し之れを犯すものは首がコロリと落るといふ時節であるから本町以東の者は一人も西へ往く事が出來ぬ爲め辻々の混雜は非常な事で中には廣小路の橋の下を潜り泥まぶれて火事場へ駈ける者もあるといふ慘狀、何分にも人寄が無いので火事は燒け放題と倍々廣がつても、祭りは祭と澄し切つてゆう〳〵と棟つて行く、此有樣を馬上で見た其年の町奉行は臨機例外の命令を發して一時辻々の固めを解かした、そこで數萬の人民がドッと火事場へ押寄せて漸くに鎭火をさせたが、此時の奉行は無論翌日は切腹頂戴の覺語で應變の所置を施した處が反つてお褒めの言葉を頂戴したといふ美談もある

先代の黑船

末廣町の黑船は延寶二年に進水して八十餘年間の航海を續け稍老朽に及んだので明和九年に更に一艘の船を新造して浮世の波にうたれながら幸に暗礁にも觸れず、沈沒もせず、今以つて年々曳渡して居るが、其時の老船は安永二年に大枚五兩にて（何んたら安いもの）美濃の上有知へ賣渡した、編者は自町の事でもあり殊に名代のお祭り狂であるから此先代の船の構造が頻りに見たくなつて明治三十九年四月十五日に遙々と美濃國武儀郡上有知町へ黑船探見に發足した、此日は祭禮の當日であるから町は非常に賑やかで同所相生町の辻に至ると八幡丸の幟り吹貫を風に靡かせ金色目映く飾り立た、黑船が一艘見へた、扨こそ之れが吾が末廣町の先代の船で百五十年前我々の先祖が乘り捨た姉妹艦であるかと思へば何んとなく一種の感にうたれて懷かしい心地がした、夫から同町の總代

に就いて船山の記錄と云ふ古證文を一見し昔の緣故を以て今の梅逸の幕の圖を上有知町の爲めに模寫する事を約して歸名したが斯んな事もお祭屋には趣味があるので面白い

黑船のへケベケ

名からして奇體千萬なヘケベケとは一名を馴子舞と稱へ二百年も前から明治の初年迄行つて來た奇習であるが、其傳來は昔藩主の御座船を支配する、御船手組の古例を船の緣故を以て寶永年中に末廣町へ移した儀式である、先づ男子十五六歳の時初めて黑船に乘り込むを水主(カコ)乘りと云ひ其後三四年過ぎて元服をする（昔結髮時代に前髮を剃り落すを元服と云ひ同時に幼名を改名して權兵衛八兵衛となる）其元服者に此ヘケベケの式を行ふが慣例で、夫れは六月十一日の夜本囃子が濟んで後ち祭宿の座敷を舞臺として總て能樂式に間取り、四方に注連を張り舞臺の中央に大

釜が一ッ据へてある、其脇座に年番の行司が斜に構へて居ると當年の元服者は麻裃で棧俵に井戸繩の紐の付けた冠り物を戴き（或は顏に彩色を施す事もあるが夫れ等は總て物着せ役の仕事でお當人は如何やうとも成され次第と云ふが樂屋の秘傳である）其裝束が出來ると中老が案內して舞臺に罷出改名の披露をする、行司は當所の嘉例であると注連の張つた摺子木を三寶にのせて持ち出し之れを當人の肩に擔がせ『ヘケベケノカワアカキヨロン』と云ふ呪文を大聲に唱へつゝ笛太鼓の囃子に連れて釜の周圍を片足にて三度廻るといふが儀式である、此式が終れば千秋萬歲目出度由を述べ、夫れより行司は元服者に對しいろ〳〵の所望を始める謠曲、船歌、讀書、算術、舞踏、端唄、都々一、手品、輕口抔其人々に應じて試驗同樣に難題を持出す、これも又嚴格な儀式中の一ッであれば知らぬ存せぬでは通り切れず、注文が出た以上は絕對絕命曲みなりにも仕て退けねばならぬと云ふ奇妙奇體な傳習があつた、それで元服の年に

は竊に隠し藝の一つ二つは研究していざ鎌倉の用意をするといふ馬鹿氣た事もあつたが流石明治の御代となつて元服に世話の無いチョン髷が無くなつたと同時に此〳〵ケベケの弊風も漸く絶へてしまつた

立翁

元服の〳〵ケベケ男
照らされて
顔赤キヨロン
キヨロンしてけり

門前町の番衆

是も又奇妙な慣例で門前町には番衆と云ふ事がある、それは毎年順次に家持借家に抱らず家並十戸宛此番衆が當つて祭禮の六月一日から山卸し迄小半月の間は朝から夜る迄祭宿に詰切り中老若い衆の接待役を勤める事である、先第一に宿の掃除から勝手の賄ひをはじめ、韮寢のお枕、お目醒めのお茶菓子、お慰みの碁將棋迄、萬事萬端手ぬかり無く取揃へて終日終夜饗應に打掛つて、何分にも御機嫌を損せぬやうと御無利御尤で何處迄も叮重に待遇し、其上に又入費が中々にかゝつてお負けに代人を許さぬ、まだ〳〵夫れのみで無い立派な戸主が雨天でも敷内は下駄を履く事がならず、素足の儘で庭に這ひつくばつてをる、夫れで若し悴が若い衆で其親が番衆でも町則なれば仕方がない、悴が番衆と呼べば親父は〳〵イと罷出て敷居外に兩手をつき御用を承る、お茶を持て來い〳〵イ

貧盆に火が無いぞ、〜ーィと丸ッ切り奴隷の如くに使用される、之れが洒落や慰みでなく古來よりの慣例を眞面目で以つて嚴格に實行してをつたからおかしい、夫れで門前町は此番衆が當るからとて轉宅して來るを躊躇したくらゐであつた、斯んな弊風も時節到來末廣町の〜ケベケと同じく明治十四五年頃に漸く絶へたやうで今は其談柄のみが殘つてをる

昔立派な主人が此番衆を勤めた時の述懷に

井戸端の皿の始末もさせられて
かなしきものはこゝのばんしう

黒船のしくじり

今は昔文政十三年六月十五日（試樂の日）時の藩侯齊朝卿（源順樣）突然山車御見物との事で船は若宮前に飾り立、御殿樣には三四間も隔つた正面に床几に召し、熊膳丸前の木戸より通行を禁じての御上覽であつた船は例の如く猩々、春日龍神、船辨慶の能舞を御覽に供した處、何歟新規な手踊りを一ッ仕れとの御所望、何分臨時の御好みであれば早速に準備が出來兼、彼れや是れやと船中は上を下への大混雜で少々隙どつたを短慮の御殿樣にはッイと床几を放れ、馬鹿な事ちやと御不興の體で南へヅン〳〵お成になつて門前町の陵王車を御覽の上殊の外の御機嫌で御歸路には陵王車は町境迄雛子ながらお見送申すと云ふ盛況であつた、そこで船車も漸く準備が整ひ御歸りを待受けて充分に御機嫌を取戻さうと意氣込んで居る處へお側の役人が駈來つて、船車に於ては御歸路御目通り

は相叶はぬ、燈火を減して横町へ曳込めとの御上意、最早恁麽とも致方が無いので其夜は閉門同様謹慎して明る十六日は祭禮の當日なれば例の如く三之丸天王社へ曳渡し、吉例によつて辰巳櫓の御上覽所へ曳出さんとする際又もや暴風吹來り、船車に限り來るに及ばず、打囃子を中止し即刻歸りませいとの厳命、他町の山車は意氣揚々と囃子立て、エイ〳〵聲勇ましく御屋形さして曳出すに、船は獨り俊寛然と取殘され、囃子さへ音する事もならず、拍子ぬけとは此事にてすご〳〵ごろ〳〵船宿さして漕ぎつけたと云ふ不名譽千萬な咄しもある

又中須賀町の獅子車も一度斯んな目に遭つて御目玉を頂戴してお目通りが叶はず、駿河町の坂下迄曳込んだと云ふ失敗もあつたげな

雷の太鼓

和泉町の雷電車が雷鳴に用ひる大太鼓は承應元年に車と同時に出來た太鼓で、其音調は最も有名な太鼓であるが、此太鼓の打方については古來研究した人も多くあつて、其皮肉を聞くに、先づ陰陽の撥をもつてゴロ〳〵の鳴り出しをはじめ、遠雷の鳴らし方から小雷、大雷、夫れが段々と烈しく鳴り渉つてピシャ〳〵と落雷の音調迄は中々に呼吸があつて骨の折れたものであるさうな、是が又外の車と違つて太鼓斗りの囃子であるから下手な鳴らしやうでは掛取が曳き惜いと云ふ事である

昔同町に此太鼓の名人があつて其熱心な事には雷鳴のする時は必らず五條橋の上に立つて其鳴音を研究するに、少し雷の鳴り方がまづいと腑に落ぬ顔色で天をにらみア、では無いに……己れの方が餘ッ程上手ぢや……斯んな鳴りやうでは車が動かぬワイ

雷に
まけぬ太鼓の
叩き振り
どこ〳〵迄も
ひゞく
なり音

蚊帳の中の雷

七間町と上畠町の山車は創立が古いので両車とも天井が無い、夫れで天幕を張るには七間町は四方に幕杭を建て笹龍膽の紋を染抜いた幕を打回し、和泉町は雲に稲妻の模様の天幕を張るが例であるのに、茲に面白い趣向と云ふは今より二十年も前の事、若宮前で此雷車が休息中天幕として崩黄地に紅絹縁りの蚊帳を釣つておつたを編者は見た事がある、意外……意外……雷を蚊帳の中へ入れたは力らの強い考案で兎角に雷には恐ろしい意匠家が絶えずあつたと見へる

お多福の雷

昔し御上覧の節若殿様に雷車のお嫌ひな方が有つて御前に差支へる爲め雷の面の上へ又お多福の面を被せてニコ〳〵と笑つた愛嬌のよい女の雷

を御寛に入れ、又門前町の毘王の金の面と、大久保見町の慶振りの茶色の顔が殊の外お嫌ひなお殿様もあり、之れも雷様に倣つてお福の面をきせたと云ふ事である

雷の序でに最う一ッお喝し申さう、夏の晩菜に青瓜のカリモリと云ふを長く螺旋形に切つて鹽を振りかけ二三日も炎天に干したものを雷干と云ふ、其名の根據に就ては一二の説もあるが、お祭り通の一説には雷干の名は名古屋地方に限つた事で是は雷車の大幕から起つ

た名稱であると、夫れは彼のカリモリを長くねじ〳〵に切つて夫れを幾筋も竿に掛けた景色が恰度雷の幕其儘の立涌形に成つて居るから即ち雷干であると、之れもちと牽強附會のやうではあるが兎に角創立の古い丈け二百年以上も名古屋人の眼に染み込んだ加減か瓜を見てさへ雷の幕を聯想するとは是も又和泉町の名譽であらう

大蛇と大虎

那古野祭に西魚町から大蛇が出る、之れは素盞之命が退治された大蛇と云ふ意味であらう、龍の頭が四五尺もあつて顔色は精巧に出來て居る、其頭の脊後から蛇の胴體となつて長さ二丈斗りの青地に鱗形の織物でこしらへた幕を引摺り其中へ大勢這入つて尾には五尺程の寶劍を付け獅子と同樣の動作をして蛇は口をガブリ〳〵とあきながら人の波を分けて泳ひであるく、又隣りの櫻町からは虎が出る、是も二尺斗りの大虎の頭を

冠ぶつて幕は虎班の裂地で拵らゑ勢ひの能い若者が大勢這入つて猛り狂ひつゝ千里でも走つて行く（是が若し維新前で竹矢來のある時代であつたら夫れこそ一段と面白かろうに）又先年小田原町から九尺程の大鯱を擔ぎ出し、鶴重町からは二間もある鶴が翼をのして翅て來た事もあつた

編者は思ふに此祭りは創立が新らしい爲警固も充分に整頓しておらぬやうである

が獅子が出る虎が出る、蛇が出る、以上はいつその事此警固全體を動物の供奉として熊も出し（立ちながら行列させ或は金時をあしらつてもよい）猪も出し（摩利支天又は仁田を添へてもよい）猿も犬も出し（桃太郎を大將として宜い）兎と狸のかち〳〵山（或は狸の大翠玉もよい）狐の嫁入（御駕で行列もよい）其他麒麟に聖人、駱駝の二疋連れ、茲に一番大切として花のあるは高さ三間ある大きな象をこしらへ四本の足へ人間が一人づゝ這入つて外に一人は象の頭の中へ住居込み七八尺の鼻を自由自在に運動させて行列したら一しほのお慰みであらうと思ふ（此考案も餘り馬鹿にもなるまいテ）

梅逸の返答

文政の頃齊朝公の思召で辨慶車の圖を梅逸に御下命になる時。一度辨慶車を飾らせ、其實物を寫生せよとの上意を傳へしに、梅逸はイヤ夫れに

は及び申さずとお答へした、使者は格別の君命に對し不敬であらうと云ふので梅逸は透さず若し君命にして鐘馗、麟、鳳、を畫かん時其實物の拜見を願ひ出たらば如何……

又嘉永五年に末廣町船車の大幕を新調する時梅逸翁に揮毫を乞んと二人の總代は京都へ出張して兎角謝禮は前金がよからうと相談して大はづみに金拾五兩恭々敷包んで出し大浪の圖を依頼した、すると梅逸は其包をチラと見て是は〳〵御叮嚀な御土產品を頂いて呑ない、が末廣町は昔馴染の土地でもあれば潤筆料は船車へ對し御寄附と致さう、併し思召のお土產丈けは頂戴して置かう歟……

因に住吉町の怒濤の幕の下繪は文政年中に張月樵が遠州迄わざ〳〵出張して半月を費やして寫生した大作の圖であるが其當時の謝禮が金拾兩、月樵の曰くあんまり安いではないか……

又明治二十六年に新調した傳馬町の大幕四神の圖は岸竹堂の筆で其潤筆料が金貳百圓……

畫家の清

渡邊清は前の名を周溪と云つて文化年中に名古屋に生れた土佐派の畫家であるが、天保時代には太平の餘澤に乘じて各町の山車がどれもこれも修復改造がはやり出した時、當時の意匠家として皆此渡邊の門を叩き彫物金物の圖案下繪をはじめ人形の裝束から雛子の手まで總ての考案を需めた事で夫れが爲め所々の祭り車に同氏が手の跡の今に存在してをるものがいくらもある、兎に角名古屋祭りには多大の美觀を與へた人物として編者は最も尊敬する

其他の畫家では山本梅逸、森高雅、大石眞虎、張月樵、山川墨湖等いづれも祭車には腦髓をつゐやした連である

お祭り好き

章善院公をはじめ第二に源順様と云ふお殿様、之れが非常なお祭り好きで常にお慰みの山車は二ッも三ッもお庭内に飾り付けてあつて小性共に囃子をさせ日々御愛觀があつたと云ふ、お殿様が此通りであるから下々にも隨分とお祭り氣狂ひがあつた、中にも一名お祭り庄サと呼ぶ男抔は年百年中お祭りの外餘念は無いので假令ば權現祭りは最う幾日で有ると突然問へば、今日から百八十五日目であると苦もなく即答する程のお祭り好き、又祭りの圖畫に委しかつた高力先生や、近くは土岐の定様、杉山の新吾様といふお侍ひ抔も中々の熱心家で車といふ車には必ず附隨して其見る所は多く棍取が車の扱ひから力持の優劣に無我夢中であつて、曲げ塲が濟めば地面に殘つた輪の跡を監査し其功拙を批判する事が最も皮肉であつた

今もお祭好きの者をさしてお祭庄サと仇名する事が一般に通じてをる、編者は最も評判のお祭庄サの一人ではあるが本書を著すに際し更らにお祭調査と改名した

お祭の繪

小田切春江の師、高力種信と云ふ人は圖繪も細密で生涯著述を樂み、深切極めた隨筆ものも澤山あるが殊にお祭がには熱心な人で祭車の圖が最も巧であつたから或時國君の御所望によつて御前で祭りの繪を畫く時、祭りを書くには祭りの囃子がなくては面白う書けぬと自ら大聲して「オヒヒリヒリトロ、ヒリトロヒー」と口笛を吹ながら、ヤアーエンヤ〳〵と乘地になり次第〳〵に佳境に入つて遂に腹這ひとなり、兩足でドンック〳〵太鼓の拍子おもしろく夢中となつて揮毫最中、畫の上へ涎れをダラ〳〵とたらしたので餘りの事に藩侯もいかゝするぞと熟視して居られ

しが、先生そんな事にはお構ひなく垂らした涎もエンヤ〳〵と彩色へ塗り込んで仕まつたと云ふ立派なお侍ひ様であつた

編者は云ふ昔し巨勢金岡の畫いた馬は自身馬に成つて畫いたから其馬は夜な〳〵出て草を喰ふ、高力先生の祭り車も又斯の如く三昧に入つて神に至る所是れでなくては畫の妙所を見る事は出來ない……

此山車獨り動き出したであらう

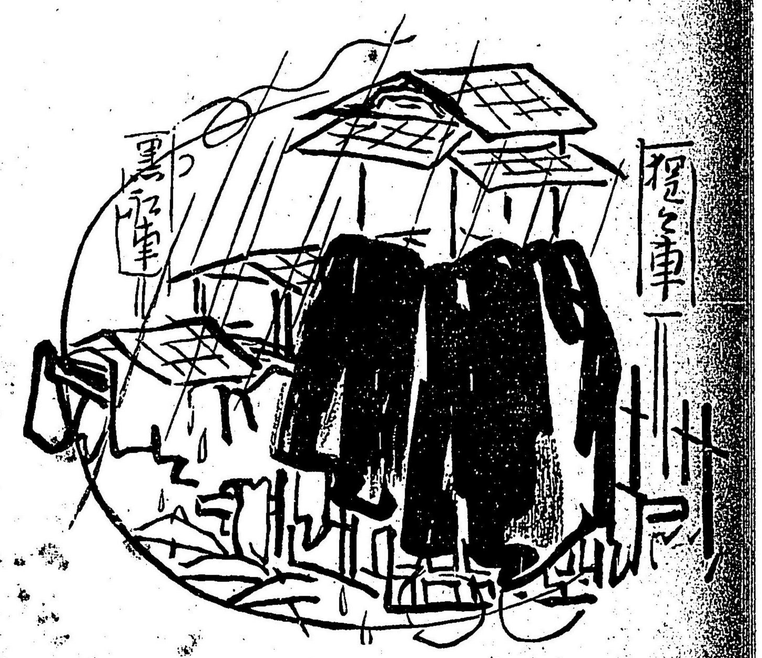
口笛を吹いて乘地の腹つゝみ　鳳友

ぽん〳〵出して足太鼓うつ

山車の博覽會

明治四五年頃であつたか東別院を會場として名古屋始めての博覽會が開設された、其時の出品物は金の鯱をはじめ德川家の什寶、其他市内の金持連から自慢の古器物を澤山に持出して夫れが東掛所に列べきれず其分場を西掛所に設けた、そこへ一番人目をひく眼醒しい物を陳列したいと云ふ考へから、名古屋の山車は美術品中の大物であれば之れを何輛も曳寄せて境内に飾り立てたらさぞや壯觀であらうと各祭り町へ交渉に及んだ、然るに大方の町は事情があつて之れに應せず本町の猩々車と末廣町の船車の二輛丈け賛同し西別院へ曳込んで本堂の南に飾り付けた、折も折りとて翌日から大濕氣に出合ひ合羽で包んだ船車も浮く程の大雨に沈没同様の有様、隣りの猩々もこれでは堪らぬとヤケを起し毎日〳〵瓶から酒を汲んで呑み續けの降り續けとは中々の大失敗であつた

福者云一體全體此山車と云ふ物は總て活動するものに出來てをつて、夫れが四拍子の音樂に乘り地となり、十丈の青綱にとまつた大勢の曳子が



揖方の木遣節に意氣を合せ、エンヤー〳〵と曳出す勢ひに目方の千貫目もあらう金飾燦爛とした大きな山がヂリ、〳〵と搖き出す、此光景が最も愉快な面白いのて迚も〳〵形容詞の及ばぬ妙味が備つてをる、夫れを只据付た儘では活人形や雛棚を見ると同樣、何んの趣味も價値もある筈は無い、動かぬ山なら出さぬがましぢや

祭車と西洋人

去年の若宮祭りであつた本町三丁目邊へ黑船と陵王が歸り車の賑やかな囃子につれ數多の提灯ゆられ〳〵て來かゝる時二人の西洋婦人が俥で通りかゝり此意外な音樂に山の如き祭車が滿艦飾して進み來る光景を見て思はず俥の上に躍り立つて双手をあげ身をもだえて大聲に喝采した、猶紀念に提灯を呉れいといふ事であつたから珍客の事故一ッ宛進上したらさもうれしそうに喜んでいつまでも祭車を見送つて居たが之れにつけて

も西洋婦人は實に無邪氣で天眞爛熳とした趣がある、もしも名古屋の婦人が俥の上に彳つて聲をあげ拍手でもしたものなら疑ひなく發狂者として警察の御厄介であらうに

又西洋人は此祭車を何んと觀察する歟、既に今年も祭禮の當日には寫眞機を携へて山車に附隨し所々で撮影した洋人を五六人も見うけた

内親王殿下の御上覽

明治三十六年の事であつた、富美宮、泰宮、兩内親王殿下には京都へ御下向の途次名古屋離宮へ御一泊在らせられた、此日は六月十五日で若宮祭の當日であれば御慰みに山車の御上覽を仰んと伺候したるに幸にも御聽許を蒙り十六日の未明に末廣町の船車、鐵砲町の獅子車、門前町の陵王車の三輛は本町大手桝形の西に飾りたて丶今や殿下の御通過を待受けしに、山車御觀覽の爲め御豫定より三十分を早めて離宮を御出門あり、

富美宮には林夫人、泰宮には同令嬢恒子の御陪乘にて人力車に召され徐々三之丸より外濠にかゝらせたもふ頃三輛の祭車は神々しき大太鼓の音を土居に響かせ松の木の間に金飾燦爛として朝日に映ずる光景を、御車を駐めさせられて稍暫く御上覽あり、殊に愛らしき人形を御覽じたまひて最も御機嫌うるはしく御通過あらせられと云ふ光榮な事もあつた

牛若の髷と辨慶の草鞋

七間町には昔から奇妙な傳へがいくつもある、彼の拜領の牛若の古面は出目法眼の作で此面を用ひし頃は同町の大江と云ふの婦人が此牛若の稚兒髷を結ふが例で若し餘人がおぐしをとる時は途中に必ず元結が切れるといひ、其他いろ〳〵の奇端があるので今はこれを用ひず社壇に納めて判官殿と崇め毎年祭禮中には祭宿に安置し一般の拜觀を許す事であるが小兒が頭痘の類を祈願すれば速に癒るといひ、又此判官殿に扇子を備へ

て其扇を所持すれば其年は必ず運勢が強いと昔から言ひ傳へてをる。
辨慶が先車の年は草鞋を履き後車の年は草履をはくと云ふ事、之れは何の意味か町内でも分らぬと云ふが近年は大方わらじ履きで通し切つてをる

又七間町一丁目の東側に大きな松の木が今もある、曳始の當日には車は此松の下に曳込むが例であつて之れを一名牛若松と呼ぶ

辨慶の序でに一寸咄して置かう、文政年中に當市の鶴重町に忠兵衛と云ふ日雇頭があつてそれがお作事の御用で德川家のお庭内へ出入りをしてをつた、或日其作事場へお殿樣がお成りになつて此忠兵衛の大男の色の黑い眼玉のきり〳〵した容貌がお目に止まり、彼れは辨慶ぢや、七間町の辨慶ぢやと殊の外の御意に入つて以來辨慶忠兵衛と仇名を賜り代々日雇頭を渡世とし今は其四代目で辨慶の清九郎と云ふ、至つての小男なれど其坊主頭に鉢卷でもさせたものならば

こやらに辨慶の面影があるので今も此社會では相應に名の通つた仕事師である。

おまつり會

茲二十年も前から此市中の眞中に奇妙珍無類な團體が一ッある、夫れはお酒落會と云つて浮世を茶にしたスヂ男が二十人も集つて春秋二季には變痴奇な會を催す事で、平素眞面目な親爺もお腐の下からクッ〳〵と命の洗濯をする爲め去年八事山の頂上にお酒落井と云ふ五色の井戸さへ堀つた連中、夫れが今を去る十年も前の事會員の一人が亭番となり、時は卯月の上旬でそろ〳〵と油ののりかゝつた頃お祭り會といふを催した事があつた

來會者は皆各町の山車の大將に假裝し、林和靖、源の牛若、武藏坊辨慶文珠菩薩、三條宗近、蛭子三郎、大黑天、神主、猩々、雷に迄成りすま

して夫れ〳〵に意匠を凝らした服裝で出頭した、先づ會場の門口には古式を採つて竹矢來を結び、玄關には幕を張り、屏風を立て、主人は麻裃着用で出迎ひ十畳の茶の間に通した、床には陳元贇が筆の天下泰平と云ふ幟の軸を懸け、前には榊が挿してある、夫れに大きな袋形の風呂にお湯取の釜をかけ其他茶器一式も皆祭車に因むものを用ひて茶を振舞ひ、菓子には中市場をきかせて岩形の大鉢に牡丹餅を盛り夫れに石のはしが附けてあ

る抔振つた趣向であつた。夫れから大太鼓の音を合圖に廣間へ通ると離れ座敷で笛太鼓の囃子が始まり夫れにつれて麾振りに紛裝した少年が膳部を運び出した、膳椀は總て二葉葵のちらし蒔繪で、其献立のあらましは五條燒の橋畚の向ふに、太刀魚の長刀作り（七間町）汁が宮町のから、こに傳馬町の芹、飯は小鍛冶の狐めしで、椀盛には傳馬町の鶴と、宮町のせんまいに、桑名町の湯の花、燒物は長者町の鯛で、香の物が上島の雷干、吸物が中市場の鞠の浮麩に、八寸が七間町のさゞ波の鰭に龍膽の砂糖漬けと云ふ御馳走、其他進め肴には雷の馬糞抔恐ろしい珍物も出て酒は猩々の瓶の中から飲み放題、そこでそろ〳〵醉ひが廻つて眞面目な林和靖が詩を吟じ出すと宗近が不調法に劍舞をはじめる、牛若の網渡りが喝采に終ると、文珠が智惠で獅子の洞入り、其尻付を見て蛭子大黒がころがつて笑へば、神子がお酌に陽氣づいて猩々がよろ〳〵と舞ひ出すと、雷は太鼓を叩いて暴れ廻ると云ふ、騒々しい餘興も歡を盡していざ

退散の場合となつたが、どろ〳〵に酔つた泥辨慶が捻鉢巻で動くともせぬを、エンヤ〳〵と挺でこじ出し、夕暮頃に提灯つけて歸り車とは、中々に骨の折れたお祭りをしたものである

船歌

黒船車の船歌は前に出した山車圖繪の中に其一節を載せて置たが、中にも若宮口説は延寳時代の作歌で尾張家の御座船にも用ひし由緒もあり且つ古雅な文體であるから好古家の爲に茲に再記してをかう

若宮口説

サシ『あら有難や君が代の久しかるべきしるしあり 地我は名古屋の素生にて ェイ年久しくも若宮のェイ八幡宮ね宮仕へ九夏三伏の暑き天にもおこたらず ェイ嚴冬囮雪、寒きあしたにもェイあゆみを運ぶ宮守なり、頃は南呂中の五日の御祭禮、參り下向の人々の袖をつらねて色めく有樣富貴繁昌の名古屋なり、貴賤上下參籠しェイヤヨェイヤコノ、サシ『小夜もなかばの事なるに 地内陣俄に震動して御戸を開かせ給ひつゝェイ妙音正しき御聲にてェイ當社は尾張の守護神たり、夫れ吾朝は小國たりと申せども唐土天竺にまさりたる神國たる故によりェイげに心なき草木迄も神風にのべふす、之れ神德にあらずやェイあらたに神勅まし〳〵て又は武運長久のェイ二首の御詠歌にサシ『君が代の 地榮ね久しき例しにはェイ神ぞ植ける若宮の松、鶴亀のェイ齡ひを君になぞらへてェイいく春毎に猶や榮ねんとェイ添けなくも御戸代のェイ錦の内よりあらたに御聲ましませば、御代は萬代末代と參籠の人々感嘆肝にめいじつゝ、壽の御酒を供ねつゝうれし

サシ『目出たのゝエイソリヤ若枝もェイ〳〵榮ゆェイコノ葉も

猶此外船車に多く用ひし船歌は、正月口説、松揃、花見車、都わたり、名古屋口説、佐渡節の類で、明和、安永の頃には三の丸天王前より片端に至るの間は大太坡の三ッ拍子に乗り此船歌のみにて船を引たものであると云ふ、序でに名古屋口説を最う一ッお聞かせ申さう

名古屋口説

サシ「我れは山家の者なるが深山隠れの埋れ木の ェィ花咲春もなかりせばいざや名古屋へ参りつゝ、芝の庵りを引結び思ひの儘に世を經んと ェィ年頃住みし古郷を又しのゝめに立出る ェィいくとし馴れし友とちへ一首の歌をつらねける ェィヤヨェイヤコノ、サシ「たらちねの地よゝ住馴れし古郷をサシ「げにいづるには しのぶ芝の戸ヤヨェイヤ 面白や「あゝならはぬ旅の道なればェィいそぐとしもはなけれども尾張三河の境川イヤ、サシ「古郷遠く鳴海潟サシ「雨に宿かる笠寺や、戸部山崎を打過てェィ驛にも頓て築出しの神の恵みも熱田なるェィ先づ明神へ參詣し御手洗川で垢離をかき君もめでたうまし〳〵、末繁昌と伏拜み八十末社の神々を心静かに拜禮し、偖立出て行程に、ェィまだけふの日は高倉や駒をはやめて打ける馬士は小歌をうとふ坂イヤ、サシ「爰は尾頭坂一の鳥居〳〵行けば程なく今はたゝ一と村雨の古渡りェィ雨宿りして犬見堂びやう〳〵とあるけしきかな、そこで一首の歌をよむェイヤヨェイヤコノ、サシ「住馴れし我古郷に犬見堂サシ「佛のちかひをたのむぞや佛の〳〵ちかひを頼む行末を、名所舊跡殘りなくェィいざ見物橘町口も夕陽に傾けばェィ光りは猶も寺町や、跡なるつれを松原やゆたかなる代に大久保見ェィ君の恵も廣小路花の名古屋に着にけり、偖も名古屋の繁昌ェィ申もなかゝ〳〵おろかなり國土安全長久に猶増民も富榮ゑ豐なりける御代とかや嬉し

「光りは猶も寺町や」は門前町「跡なるつれを松原や」は末廣町「ゆたかなる代に大久保見」は鐵砲町であらう

猩々酒呑む

端唄に名高い十日夷の替歌にお祭り盡しで恁う云ふ唄が出來てをる

「猩々酒呑む鶴は芹、雷はころ〳〵二福神、お湯取り笛吹く
唐子は太鼓打つ、三條小鍛冶の狐面、獅子に牡丹に橋辨慶

又若宮祭りの方にも

「祇園黒船舟遊び、玉屋町は文字かき西王母、中須賀石橋
大久保見、チンチキ、チンチキ、チンチキ、チンチキ、鉦たゝき、太鼓の龍神天神笛を吹く

前の東照祭の方が上作ではあるが俱に此歌は大江尾京の戯作といふ、大江尾京は本町津の國屋三右衛門といひ天保年代の名物男で一風變つた人物、即吟の狂歌が上手で奇行逸話も澤山ある

盆ならさん

昔盆中には愛らしい女の兒が五六人づゝ手を引き連れて唄つて歩行いた其盆ならさんの唄に

「門前町の黒船ごろぜ、幕は緋純子葵の御紋、中の囃子の面白や〳〵

此唄は二百年以前の作らしいが黒船は最初より末廣町の船であるのに門前町とあるので、折節疑問を聞く事であるが、それは別の仔細でもあるまい、其頃熊膽丸の前に船を飾るが例であつて其近傍が門前町であつたから其光景を其儘唄つたものであらう

七間町の辨慶さん

三四十年も前から辨慶車の囃子に合はして恁う云ふ唄を聞く

「七間町の辨慶さんは〇〇〇ヒヤアーラ

此卑猥な唄を子供は不遠慮に往來を唄つて歩行き又は藝妓抔が三絃にのせて打はやす事もあるので或るお祭り好きの風流家が齒をならして左の如く修正したのが今も一般に流布してをる

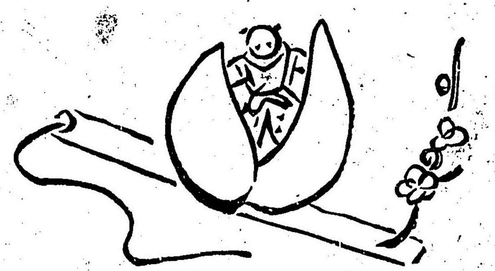
「七間町の辨慶さんは眼玉ピーカヒカ　お眼玉ピーカヒカ
廻る〳〵牛若　ハリワイサーノエーンヤ

お祭の玩弄品

毎年祭禮の時期になると手遊屋の店頭に高さ六七寸で木と紙で作つた猩々や鶴の山車の手遊びを賣り出す、又煎餅の福引の中から一寸位ひのお祭りが出る事もあつた、夫れから面白いのは雷のおもちやで、是は馬に乘つた雷の形ちを土で作つて、底には馬の毛で刷毛のやうに毛が生やしてある、之れを椽の上に置いて兩手の握り拳でゴロ〳〵と叩けば其音の響きにつれて雷は自由自在に運動するといふ面白い意匠、又古い〳〵寶暦年代には玉屋町の西王母で、糸を引くと桃が二ツに割れて中から人形が出る古風なおもちやもあつた云ふ最う一ツは泥辨慶の人形で薙刀を振り回す

仕掛に成つてをる、之れは無邪氣な所におかし味があるので今も祭禮には澤山に賣れる、又牛若のキリ〳〵舞ひもあるが之れは雅味が薄いので辨慶よりは賣れがわるい、此牛若辨慶を考案して賣出した玩具屋は杉の町の二丁目で通稱お化けのゴタ〳〵屋と云ふの親爺であつたさうな

夫れで四月の上旬より五月六月へかけて男の子供は皆お祭ごとをして遊んだものであるが、中にも富豪家の好き者には子供をだしに先づ自分のおもちやとして高さ二尺位の山車の模型を造り



寶暦時代玉屋町西王母のおもちや

夫れに人形から水引、大幕、天井、金具一式迄總て本物に寸分違はぬ善美を盡して一輛に數百金を費やしたと云ふ贅澤なおもちやもある

參考として前の寫眞版に掲げておいた京町の小鍛冶、七間町の辨慶のおもちや車は實に精巧を極めたもので、幕水引の縁から勾欄の彫刻をはじめ天井の上げ下げ人形の働き迄充分の仕掛けが出來てをる

夫れに驚いたは總丈三寸位の人形の頭で顏面は凡五分程もあらうか夫れが糸を引くと眼を動かし、舌を出すと云ふ細工が仕てある、お負けに此山車に附隨した天幕、雨障子、提灯の類、其他楫取、綱引の人形數十人迄悉く完備してあるとは眞に至れり盡せりの構造である

夫れに反して茲に又手輕い趣向は、二尺四方くらゐの格子形で多くは天井無しの仕組臺に車を付け其中へ子供がうれしさうに乘り込んでをるを前に五六尺の綱をつけて大勢の子供が夫れにとまりエンヤ〳〵と往來を引廻つて遊んだ事は茲二十年も前迄は町々に多く見る事であつたが今は乳母車で此代用を勤めてをる

繪草紙

昔東照祭で往來に矢來を用ひた時代には其通行を堰切らぬ時刻に多くの繪草紙賣が出たもので三尺斗の竹の先に山車行列の次第を摺つた麁末な繪を何枚も挾んで繪草紙〳〵と呼んで賣りあるいたものであるが今では若宮祭り同樣祭車の前後には必らず二三人の繪草紙賣が附

隨して來るが昔ながらの風俗と云ひ之れも又祭り中の景色である

茲に一ッ痴癡にさはるものは此神聖な音樂を奏して進行する祭車の近傍をも憚からず其雜踏を目的にさま〴〵の行商人がぞろ〳〵と出て來る、それもよいが中には飴屋の笛、豆賣りの太皷、偖は人出を利用した廣告屋のドカチヤガ囃子……、世が世ならば見事手討ちにして呉れうものを

祭が濟んだに坊あよべ

と云ふ事は昔より云傳へておるが是は別段意味のある事でもない、只此祭禮を見物するに長い〳〵時間往來を止められて居つて漸く祭りが渡り堰切りが解けて、やれ〳〵と子供の手を引き、サアお祭り濟んだに坊あよべ

手打と祝言

祭禮の當日に各町の山車が首尾能く渡り終つて宿元へ曳付けると大太鼓を亂打ちにドコ〳〵〳〵と叩く夫れを合圖に一同集合してヨイヨイヨイヨイ〳〵ヨヨイノヨイと、一聲に手打をして千秋樂を告げる、船車は船を宿岸へ漕ぎつけると同時に高砂の祝言を謠ひ納め、又門前町は宿へ附くと更らに大神樂の囃子を奏して解散するが古例となつてをる

山おろし

祭禮の濟んだ翌日各町の山車は早朝に之れを取片付け諸道具一切を土藏に納めて、先づ當年も首尾能く祭禮が濟んだと互ひに祝意を述べ町内の者は一同打寄つて後日の酒宴を開く、之れを山おろしといふ

布袋樣に對面

けふは八月十五日、知多郡有松町の祭りと聞き、同町は兼て名古屋市玉屋町の山車を明治二十年頃に買取つたと云ふ事であるから彼の有名な文字書きの山車に見て置たい箇所が出來て編者はわざ〳〵祭見物に出張した、當日は鎭守文章嶽天神社の祭禮で、西、中、東と三部に分つて一部に一輛宛の山車を傘鉾と共に曳渡す事で西之切の車は神功皇后、武内宿禰の人形を据ゑ、大幕は猩々緋の無地、水引は渡邊小華の筆で芙蓉、水仙、牡丹、杜若の縫がしてある、此山車は明治四五年に出來た車で人形は華新の製作と云ふ、中之切は唐子車で竹田製の人形に文字書きのからくりを乘せ、大幕は之れも猩々緋で水引は白羅紗に金糸で浪に鯉の縫どり、茲に趣向の異つた事は後ろの天井の柱に添つて長い毛鉾を二本建、そこに冷泉家の書で和文を認めた見送りの帳が掛けてある、此車は天保

時代の製作で内海の小平治と云ふ豪家が個人の物好きに二十年もかゝつて作りあげた唐木づくめの構造で殊に青貝塗の輪掛抔凝りに凝つた山車である、夫れを故あつて明治八年に當町へ買取つたと云ふ事、次に東之切の山車、是が則ち玉屋町にあつた布袋車で流石に寸法も大きく至極ドッシリとした貫目のある布袋和尚の尊像久し振りにお目に掛つた愛らしい唐子の顔……嗚呼……昔は自分が同じ氏神の若宮祭りに倶に連れ立つて曳渡した山車六輛の内、何んの因縁か布袋獨り此有松町に轉住されたかと懐舊の念の慕はしさに車に寄り添ひ愛かしこと見まもるに、人形の姿勢と云ひ、裝束の配合、其他極彩色の樂太鼓、唐木の勾欄金具類迄實に結構善美を盡した製作で殊に一層見事なのは猩々緋の大幕、正面には鳳凰と龜、右に猛虎、左に蟠龍の金糸縫、此下繪は山本梅逸の筆で今も金色燦爛としてをる（前記若宮祭布袋車の條に此筆者を月樵と記したは誤聞で、又勾欄脇蝙蝠の下繪を奥村石蹄としたは之れは上玉屋町西玉

母車の誤り）又大幕の見送りには柳澤吾市の書で左の如き詩文が金糸で立派に顯してゐる

到處盡逢歡洽事
相看總是泰平人

水引は雲鶴の縫模様で之れは當時有松町で新調したものと云ふ、偖こそ他の古色ある名物品に對して甚不釣合な感がある

以前玉屋町で用ひし頃の雲中群鶴縫潰しの水引は張月樵の筆で目ざましい品であつたが之れは現今帝國博覽館にあると云ひ、又は海外へ渡つてをるとも云ふ

編者は此祭り見物中人形の手跡を所望したら同町の久田、梶田兩氏の斡旋で直ちに木偶は筆を染めて 安全 行司 と二枚の書を立派に書いて與れたから紀念として持歸つた

歸路、鳴海町も祭禮で爰にも又山車が四五輛あるので序でながら見物するに、是は脊もひくし人形も無く只打囃子のみで興味はうすいが構造が古いので何處となく豊かな趣を備ねてをる、茲に一ツ當所で有名なものは大獅々で脊の高さは一丈二三尺もあらうか、夫れに一斗樽位の朱塗の面に赤頭を長く垂れ、赤地平袖の着附に萠黄地の側襷と大口を着け、赤い大きな手をぶらり〳〵させて濶歩しながら偶には其手をもつて往來人の天窓をお見舞申すと云ふ奇體千萬な作り物、其仕掛けは中へ大男が這入つて自由自在に運動すると云ふ無雜さな中にも何處やらに雅味があるのでおかしい、そこで此獅々の起因を聞くに往古鳴海潟の時代に此海岸へ一疋の獅々が泳ぎ着いた事があつて夫れより淺間社の祭禮に其獅々の模型を作り始めたもので隨分と古い〳〵祭りであるさうな、夫れで雜新前五十三次の宿場として遊女屋の軒を並らべ繁昌を極めた頃には遊女共が此獅々に追はれて逃げ惑ふ樣も一興であつたと同所での古老のはなし

お伊勢山の作り物

伊勢山町に村社神明社があつて八月十五日の例祭には氏子全部が作り物をしてお祭りをするといふが、古來よりの仕來りで、殊に天保、弘化年中には德川家の御殿樣さゑ毎年御見物にお出掛があつたと云ふ、此又作り物の仕樣が無雜さにも壯大な作り方で年々の趣向に珍無類な意匠も澤山あるが、中にも先年伊勢道中の作り物の内巨大な趣向と云ふは、甲の町と乙の町との屋根の上に板を渡し參宮線の鐵道を造り其上へ長持を二十も三十も連絡して滊車進行の有樣を作り、或る町では屋根から屋根へ字治橋を架けて往來を自由にさせ、又二タ抱ゑもある材木を建て鳥居をこしらゑ、或は丙の土藏と丁の土藏に蚊帳をヅンブリとかぶせ、夫れに注連縄を張つて二見の浦をきかせ、又は人家五六軒を通して古市の妓樓に模擬し、藝娼妓が人形のあたまには西瓜、東瓜、南京瓜をもつておかし

く作る抔それは〳〵大袈裟な趣向で見物をアッと言はせる、お伊勢山の作り物といへば之れも又名物の一ッである

最う一ッ大きいのは近年當郎團聯隊の軍旗祭又は招魂祭に各兵士連の考案で所々に作り物が出來る、材料は皆兵器一式を用ひ隨分と大きな物を作つて仰天さするが流石は軍人の趣向でステンプな中に趣味もあり總てが大筋で豪氣な所が又おもしろい

兒宮の作り物

廣小路の朝日神社の末社に兒宮と云ふ社がある、爰の例祭は明治十二年より創立して毎年七月十一日に氏子の各町は軒毎に笹提灯を出して賑やかなお祭りを執行する、此日氏子内の富澤町では兩側の戸毎に見事な作り物を陳列する、これはお伊勢山の作りものとは作り方が違つて至極高尚な趣向でどの家も〳〵考案に骨を折るので年々に奇拔な意匠が澤山あ

る、それで近年は此祭禮の呼びものとなつて夜るは非常な見物で其混雜は一と通りでない

裏町の作り物

上畠裏四軒道邊の町々では六月一日より天王を祀り餘興として大仕掛けの作り物をした事が尾張名所圖會に出てをる、其圖樣を見るに三十三所觀世音の開帳と云ふ趣向で、四ッ乘船を立てゝ船後光とし、其中へ人間が彳つて觀音樣と成りすまし、又輪後光には大八車を用ひ皆夫々に意匠をこらして佛躰に假裝し眞面目に居並んでをる、それで群集する見物人が口々に批評するも一夜中少しも笑はぬといふが得意であるさうな、茲に又面白い事は當日の夕暮迄何んの作り物の有さうな景色は少しも無いのが火を點すを境ひにバタ〳〵と此騷動な大仕掛の作り物が暫く間に出來あがる、夫れで深夜迄雜踏して見物はひきも切らぬに夜明け頃にはス

ツカリと片つけて早朝には座一本も落ちては居らぬと云ふが是も又當所の自慢であるげな

昔或年の趣向に大きな酒桶の中へ裸體の男が紺のふんどしを締めて數十人這入り、皆俯して尻を持ちあげてをる其看板に

新そら豆

曲亭馬琴が漫遊錄に、此そら豆の圖を畫き、江戸の夜宮の作り物も是には及ばぬと記してある

馬の撓

熱田では神輿渡御大祭の五月五日、大須の馬頭觀世音では同月十八日に馬の撓と云ふお祭りがあつた、馬の撓の濫觴は信長公桶狹間の合戰に大

勝利を得られた時村々町々の人民が其祝意を表せん爲我れも人も馬を飾りたてゝ清須城へ馳せ參じた遺風であると、又馬には本馬、俄馬の二種があつて本馬は行列正しく前に印持、次に長刀、棒の手と二列にならび其あとに馬を牽く、馬には種々美麗な裝飾を施し鞍のうへに花やかな作り物を飾り立て整々堂々と練つて來る、又俄馬は裸馬に蓆を卷き幣帛をつけてあと綱をひかへ、大勢の若者が衣裝揃ひて勇ましく馬と倶に駈出す、其翌日は禮馬と稱ひ種々な趣向をして茶番狂言、趣向

ざい、流し二〇加抔續々と出た事であつた、今は此事大方に廢れて只勝敗を爭ふ競馬とのみ變遷したが熱田の馬の撓丈けは年々に行はれ、又本馬の飾馬は東部の郡村に彼の氣合ひの面白い棒の手と俱に古式は殘つて在の祭禮にはほら貝の遠音にてエイシ、ハッシの勇ましい聲は今も絶えぬやうである

趣向ざい、流し二〇加の類は百年も前から流行したもので祭禮の餘興とか盆祭り、馬の撓、おかげ參り、お札樣（お札樣とは慶應三年に天から神樣のお札が何百枚も市中へ降つて來て其お札が屋根の上へ落ちた家は夫れを店頭に祀つて一週間もお祭りをする事で、その町も〳〵お札樣で浮かれ出し二タ月三月は狐につまゝれたやうなおかしい事があつた）此時抔は趣向ざいが盛んに行はれた、趣向ざいとは名からして不明ではあるが先以て二〇加、判じものに類したもので其一例を申て見やうなら

一人の行商人の男が大風呂敷に枕をいくつも包んで背負ひ枕はよろしう〳〵と往來を呼んであるく、そこへ武家の女中らしい女が通りかゝつてモシ〳〵枕屋さん枕を一ッ見せて下さいといふ、枕屋はハイ〳〵と荷をおろし往來に風呂敷をひろげて枕を出しこれが三十錢之れが五十錢の定價ではございますが大負けに負けますから買つて下さいと云ふ、それではこれを一ッ買ひませうがいくらに負けて下さると掛合最中へ一人武士体の男が恐ろしい顏色で見物を押退け押退け、ヤイ此不埒者め、主ある女に枕をかわすとは不屆至極、夫れゝへなをれ眞二ッにしてくれんと今や一刀引拔かんとする勢ひに枕屋は驚いてマア〳〵お武家樣お待ち下され成程枕は買わしかけてはおりますがまだねは致しませぬ

又臨時の趣向ざいと云ふのに昔氣轉のある乞食があつて斯ふ云ふ洒落をして來た事がある

或日大雷が鳴つてあそこへも落ちたこゝへも落ちたといふ騒々しい日であつた、漸く雲は晴れて雷鳴も止んだ頃に赤ら顔の大男が裸體にうこんのふんどしをしめ、赤熊の毛を冠り、太鼓を二ッ三ッ背負ひ、總て雷といふ拵ねで戸毎の軒に立ち「只今はおやかましう〳〵

祭の改良

地方人の曰く、城と大根と祭は名古屋の名物である、名古屋人は祭りと云へば上も下も狂氣のやうになつて騒ぎ出す、夫れに名古屋は大小の神社が多いので年百年中お祭りの仕詰めであると、之れは名古屋祭の眞相を知らぬ皮相の批評で、編者は名古屋程祭りに冷淡な土地は無からうと思ふ、京都は言ふ迄も無い、近くは岐阜、長濱、桑名、四日市の如きも所の神事祭禮と云へば全市は休業して幕を打ち、屏風をたて親類知己は寄集ひてそれは〳〵愉快な有樣であるのに名古屋祭りは恁ういふ美風には出來て居らぬ

雜新前の東照祭は流石藩侯が主宰のお祭り丈けあつて行粧は至極立派であつたが祭式が餘り嚴格過きて祭の通らぬ町は却て火の消ねたやうな狀態であつた、雜新後に及んで若宮祭同樣の仕振りとなつてからは我儘に休車する祭車も出來、本町筋さへ屏風も立てず、況して横町裏通りに至つては祭のマの字の景色も無い、今日は所の祭禮といふに判木屋は判を彫りながら目鋭越して祭車を見あげ、建具屋は鉋持ちながら神輿を見物する、何んたる不行儀な事であらう、世の中が忙わしくて片時も業は休めぬ、十時間に江戸へ往かるゝ時節、悠々せん〳〵呑氣な祭り抔除潰しの骨頂であると、夫程に勤勉する者が山行や野遊びと來たら勝手次第に飛び出して醉つぱらいながら、己れが安樂に住んでをる土地の氏神の祭禮を廣告屋の行列同樣に心得る心得違ひの無禮者が澤山ある、況して祭町以外の者は川向ひの喧嘩で我關せず焉と澄し込み、又馬鹿な異似をは

しめたと言はぬ斗りの態度で祭事係を氣ちがひ同前に看做す抔言語道斷の次第である

是が先づ名古屋祭りの名古屋氣質で、敬神の意の薄い上習慣によつて恁んな風に育つた根性は一朝一夕に改良は出來ぬが、又一方から見れば名古屋の祭りは祭りが個々別々の狀態で一致を缺いて居るからの現象でもあらう歟

そこで編者は多年の希望を人に語つて曰く、成程地方人の言ふが如く神社の數の多い爲か從つて神事も多く、東でもコソ〳〵、西でもコソ〳〵とコソ〳〵祭りがいくらもある、夫れで祭りがダヽ草過て祭りらしい祭りが一ッも無い、そこで思ふに各神社の祭典は祭典で供進使の參向に御神事は御神事で執行し、こゝに三輛かしこに五輛と云ふ山車を一ト纏めにしたら三十輛に近い山車はあらう、是を土臺として名古屋祭を組織し彼の部分〳〵のコソ〳〵祭りは全廢し此三十輛の山車を一場に列して價千金の花の春に花のやうな祭りを花やかに飾りたてゝ全市一體に花を咲かせる大壯觀の大祭典を年に一回行ふ事にしたら、夫れこそ市の體面上名古屋祭として恥かしからぬ祭りが出來やう、如何でござる、市長を初め市民の諸君、編者は熱中して之れを建言する、千秋萬歳其成功を祈る

開府三百年祭

明治四十三年、今年は、慶長年間に藩祖義直公が清須の城下を此所に移して名古屋市街を開かれた三百年目に相當するので其紀念會を組織し一方紀念祭を行ふと同時に、關西府縣聯合共進會を開催する

其會場は鶴舞公園に接して敷地は凡十萬坪を要し、正門前に噴水が有つて右に向へば、農業館、林業館、特許館、機械館、動力室、左りの方には大建築の工業館、其他園藝、奏樂堂、貴賓館、餘興場、賣店に至る三府二十九縣の大聯合なれば其設備は最も大きく名は共進會と云つても○

で名古屋博覽會のやうな勢ひである

又紀念祭の方では、廟社の建設、待賓館、演舞場、展觀會、其他餘興としては各種の方面より種々の計畫は澤山な事であるが中にも本書に著す處の市内各町に有する山車數輛は此大典に際し一世一代の盛粧を以て華々敷曳渡すの設備は整ひ、既に各町とも昨年來より其準備にせわしく或は新調物又は修復等も大方に出來し居れば愈々此紀念祭擧行の曉には全市一體に一段の光彩を放つ事であらうと思ふ

唯殘念なは茲に本書の草稿を書終つての未來記なれば其盛況を記す事は出來ぬも如何に此祭事の盛大にして壯觀であらうかは今より想像するに足る事である

卷末に御挨拶申上候名古屋祭の概略は杜撰乍ら相認め候處序面にも申上候如く文筆が大の不調法者に候て首尾一貫不仕候爲め讀者諸君は定めて御迷惑御退屈の御事と奉察候、此邊は無垢素人の著述に御座候間寛大の思召を以て御批評等は御免可被降候

乍序各祭町の諸君に一言申上候、東照祭、若宮祭、天王祭を始め其他市内各神社の祭禮に曳渡し候山車を合計すれば殆三十輛に及ひ申候、今回各町に就て其沿革より裝飾諸道具に至る迄細密に聞取候處何れも結構至極善美を盡したる山車に御座候て外見に顯れ不申候箇所迄も種々に意匠の凝

じ有之候には驚入申候、實に故人各位が苦心丹精の程深く奉感謝候、甚失敬には候得共此山車一輛平均五萬圓と安く見積り候ても百五拾萬圓の價格は確に相見ゑ申候、中には金錢を以て得難き美術品も附隨有之候得ば最も貴重品と申て差閊も無御座候

如斯萬金にも得難き貴重品の山車三十輛は立派なる名古屋の名物品に御座候、幸に此名物品を御所有の町住民諸君は偏に祖先の賜にて幸福の御事と存上候、乍併此山車を創設仕候以上は町住民私しの玩弄物には有間敷歟と存候、所謂神社へ奉納も同様の品に候て毎年の神事祭禮に供奉仕候處の祭器に外ならずと存候、然るに中には一年に一度執行被致候氏神の祭典に際し今年は出すの出さぬの三年休車五年休車と我物顔に得手勝手の御都合上は神慮へ對しちと不敬には候はず哉、又甚敷に至り候ては傳來の祭器を他所へ轉賣致候箇所も一二相見ゑ候が之等は實に言語道斷の所置と申の外無御座と存候

茲に當代の敬神家諸君に懇望申上候は兎にも角にも神社と町住民の有ん限りは永世に之れを保存して修繕も施し年々に繼續して間斷無く神事に供奉し、所繁昌、家内安全、息災延命の御祈願を被爲遊度事に奉願上候

乍末筆各町の總代諸君を初め舊家古老の各位に御禮申上候
本書を著すに就ては御多忙中も顧みず訪問仕候節は御腹藏
無く昔物語りを御懇切に拜承致し又は古記錄の御秘藏品迄
御貸與被下多大の資料を賜り候御蔭を以つて多年の宿望に
有之候名古屋祭の沿革も世に殘す事に至り候は偏に諸君が
御厚情の難有次第に外ならずと存候、依て乍略儀茲に謹ん
で奉鳴謝候　恐惶謹言

明治四十三年一月

伊藤四郎

識

トやつこらせ一年の日子をお祭りに費して獨り万歳の大骨折り中々

中々草臥て候らひけるが茲に草稿を書終つて日ならず製本の出來た
以上は是非に一本を見せたい人がある、夫れは名代のお祭好で編者
が無二の親友大口六兵衛である、自分が斯んな事を著はす抔未曾有
の事であるから驚くでも有らうが又悦んでも呉れやう、相談にも乘
つてくれやう、序文も書いてくれやう、お祭りの古實には頗る皮肉
であつたから樂んで見ても呉れやうに、殘念……今は此六兵衛君
は此世に居らぬ……嗚呼……六兵衛が叩き込んだ門前町の大太
鼓は今も打てば鳴るのに……

明治四十三年一月十日印刷
明治四十三年一月十五日發行

名古屋祭
正價金壹圓貳拾錢

著者　伊勢門水
發行者　名古屋市中區末廣町九十番地　水野宇右衛門
印刷者　名古屋市西區圓井町五丁目一番地　箕浦甚五郎
印刷所　名古屋市西區圓井町五丁目一番地　秀文社

發行所　名古屋市西區本町三丁目　川瀨代助

不許復製

賣捌各書肆

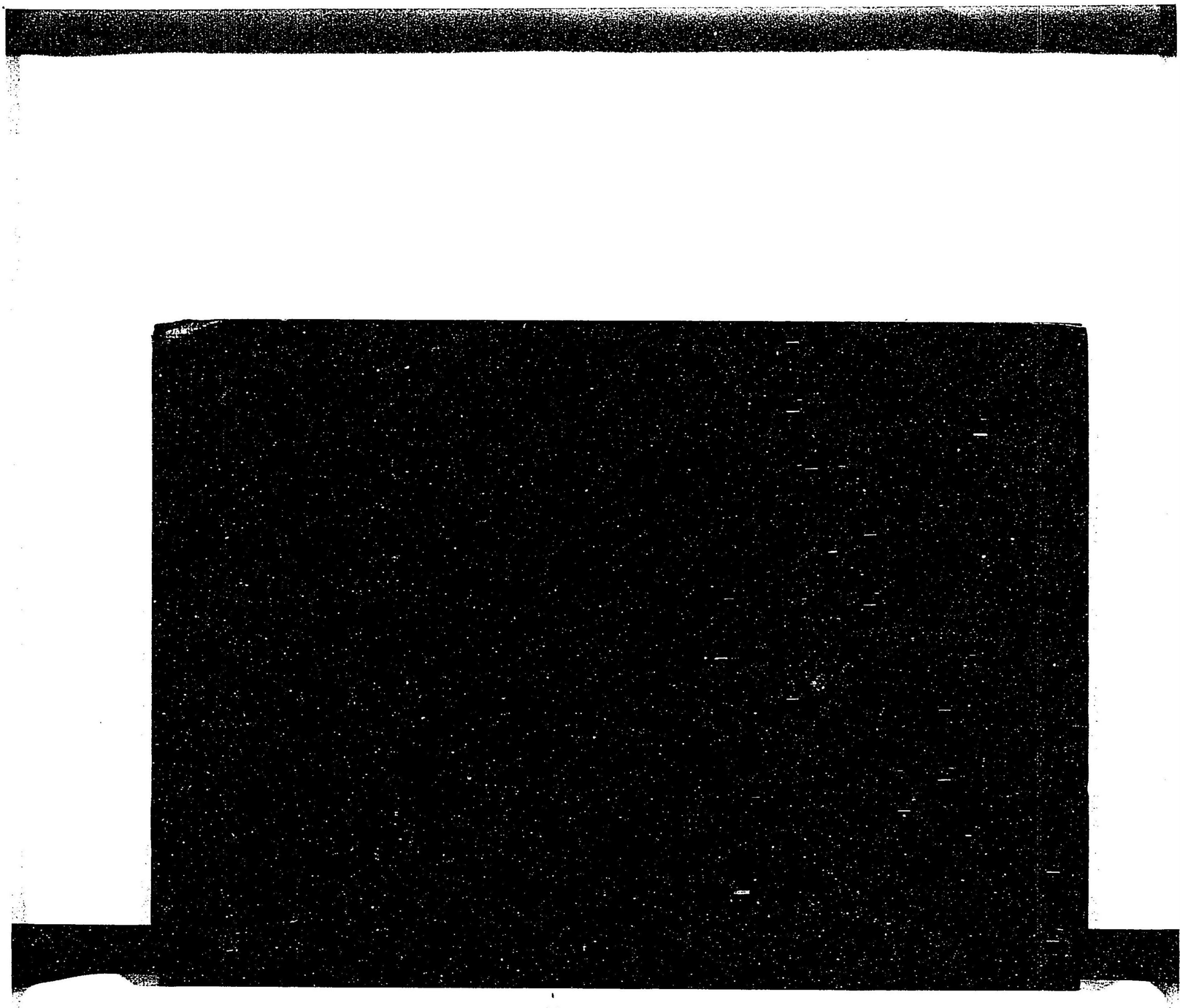
名古屋市西區本町　松岡文明堂
同　市同區玉屋町　金華堂支店
同　市同區玉屋町　小澤百架堂
同　市同區玉屋町　永東書店
同　市同區玉屋町　星野文昌堂
同　市東區富澤町　中京堂書店
同　市同區鍋屋町　森永昌堂
同　市中區鐵砲町　三輪靜觀堂
同　市同區末廣町　佐藤文光堂
同　市同區末廣町　井澤屋書店
同　市同區門前町　三浦其中堂
同　市同區門前町　後藤邦文堂
同　市同區門前町　勉强堂書店

名古屋市中區門前町　淺見文昌堂
同　市同區門前町　稻垣耐成堂
同　市熱田市場町　尙友堂書店
尾張津島町　松原堂書店
同　町　金明堂
同　牛田町　同盟書林
岡崎連尺町　伊藤小文司
豐橋札木町　富田文海堂
同　吳服町　高須豐川堂

特約販賣所

東京神田表神保町　東京堂書店
大阪心齋橋博勞町　青木嵩山堂

328
156



328
156

027375-000-0

328-156

名古屋祭

伊勢　門水／著

M43

ADJ-0134

34.12.4